課題研究 II「多様性と包摂」企画参加者募集

課題研究 II 担当： 米澤彰純（東北大学） 吉田文（早稲田大学）

2022 年、2023 年の大会を見据えて、新たな課題研究の企画をスタートさせることになりました。広く会員の方々から、一緒に課題研究企画を考えていただける方を募集します。（※今回の募集は、企画への参加であり、発表者の公募ではありません。ただし、今回の企画に参加される方に報告者として発表いただく可能性を排除するものでもありません。）

テーマとしては、大まかには、高等教育「多様性 diversity」や「包摂 inclusiveness」に関わったものにしたらどうかとのアイディアをもっています。企画の参加やアイディアを出していただくに当たって限定することは避けたいですが、主に教育面に焦点を当て、教育に関連する場合には学生・教員の大学コミュニティやガバナンスへの参加についても対象に含みたいと思います。

ユネスコ高等教育の資格の承認に関する世界規約(2019)では、SDGs 目標 4「すべての人々への、包摂的かつ公正な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」を受けて、包摂的かつ衡平な質の高い高等教育を受ける機会の促進が、国及び国際社会の責任として明記されています。日本においても、中教審「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」（2018）では「多様性と柔軟性を持った高等教育への転換」が提唱され、教育再生実行会議「ポストコロナ期における新たな学びの在り方について（第 12 次答申）」(2021)において「多様性と包摂性のある」持続可能な社会や教育への言及がなされました。各大学においても多様性や包摂へのコミットメントが進められており、例えば東京大学は UTokyo Compass 「多様性の海へ：対話が創造する未来（Into a Sea of Diversity: Creating the Future through Dialogue）」(2021)を発表し、ダイバーシティとインクルージョン（多様性と包摂性）を基本指針のひとつに掲げています。ジェンダー、民族、留学生、障がいなど、高等教育における様々な領域での門戸開放、多様性、包摂の実践とそれに関わる研究には長い蓄積がありますが、現在、これらの研究や実践を包括する形で、高等教育と多様性、そして包摂への注目が高まっていると考えています。

従来、日本の高等教育政策は、入学者選抜に関わる「公平性 equity」や高等教育機関の機能的分化の一部としての「卓越 excellence」に関わって構築されてきた部分が大きいと思います。入学者選抜における公平性は重要な問題であり続けていますが、最近の「大学入試のあり方に関する検討会議」の議論からは「形式的公平性」に加えた「実質的公平性の追求」として、多様性と包摂への価値付けが読み取れます。また、グローバルな競争を意識して日本や世界各国の高等教育政策においては「卓越」が強調され、一部の大学に対して「ワールドクラス」「世界と伍する大学」としての国際的なプレゼンスを求め、同時に多様性や包摂を重視した持続的社会の発展などの世界的共通課題の実現へ貢献する国際社会へのエンゲージメントが期待されています（Douglass2016, マージンソン 2019）。また、こうした動向に対して、包摂にもとづく高等教育システムへの高度に幅広い参加が実現しても、ワールドクラスの卓越を求めるトップ大学の行動を考慮す

ると、高等教育システム自体が水平的・階層的に多様化し、格差や不平等を固定化する傾向があるのではとの指摘もなされています(Cantwell, et.al. 2018)。さらには、知識・権力・存在の植民地性(coloniality)などと関連付けて、包摂に関わる教育、とりわけ高等教育の役割を強調する議論(Walton 2018, CGHE Webinar Series 2021)も盛んです。

本課題研究では、大学で求められている（教育面を中心とした）多様性や包摂と何か、あるいは、多様性や包摂は現段階でどこまで可能かなどを考えることを主眼としています。多様性や包摂がそれ自身価値を持つことは大前提とした上で、「なぜ？」を問うわけですが、多様性や包摂への価値付けが、日本の高等教育システムの中に存在する公平性や卓越性への価値付けとどのように関連付けて、あるいは折り合いをつけて語られ、また行動として実践されているのか？あるいは、このような議論や問いの立て方自体にどのような意味があるのか？を、クリティカルな視点で考えようというものです。

参考までに、欧州を中心としてこのような議論を多面的に展開したものとして Pritchard (2015)があります。また、例えば、日本女子大学人間社会学部 LGBT 研究会 編(2018)、 Huang & Welch (2021)など、性的マイノリティや外国人教員など、日本の問題について国際的視野を持って取り組んだ研究も登場しています。

ジェンダー、国籍、民族、文化、障がい、社会人・生涯学習など、具体的なテーマや、アプローチをどのように設定していくかは、これから一緒に考えていければと思います。「多様性」「包摂」「公平性」「卓越」といった、上記に挙げた概念そのものは必ずしも一義的ではなく、それぞれの概念間の関係も、各概念のどこに注目するかで異なってきます。こうしたことを、シミュレーション的に考える、それにもとづき日本の高等教育システムに関する議論の欠落部分を探すということを一緒に進めていければと思います。

ご関心をお持ちの方は、10 月 20 日（水）までに、担当の米澤 akiyoshi.yonezawa.a4[at]tohoku.ac.jp、吉田 ayayoshida[at]waseda.jp、までお気軽にコンタクトください。会員の皆様の積極的なご参加をお待ちいたしております。

Cantwell, B., Marginson, S. & Smolentseva, A. (2018). *High Participation Systems of Higher Education*. Oxford University Press.

CGHE WEBINAR SERIES (2021).: Racism and Coloniality in Global Higher Education https://www.researchcghe.org/events/cghe-seminar/cghe-webinar-series-racism-and-coloniality-in-global-higher-education/

Douglass, J. A. (Ed.) (2016). *The New Flagship University: Changing the Paradigm from Global Ranking to National Relevancy.* Palgrave Macmillan.

Huang, F. & Welch, A. R. (Eds.). (2021). *International Faculty in Asia: In Comparative Global Perspective*. Springer.

マージンソン、サイモン（米澤彰純訳）(2019)『高等教育の新しい地政学』Centre for Global Higher Education https://www.researchcghe.org/publications/working-paper/gao-deng-jiao-yuno-

xinshii-de-zheng-xue/
日本女子大学人間社会学部 LGBT 研究会編(2018)『LGBT と女子大学』学文社
Pritchard, R. M. O., Klumpp, M. R., Teichler, U. (Eds.) (2015). *Diversity and Excellence in Higher Education: Can the Challenges be Reconciled?*. Sense Publisher.
Walton, E. (2018). Decolonising (Through) Inclusive Education? *Educational Research for Social Chang.*7, 31-45.